

# 旧本田家住宅だより

Vol.9 2023.9



## ◎旧本田家住宅の発掘調査 シリーズ第2回



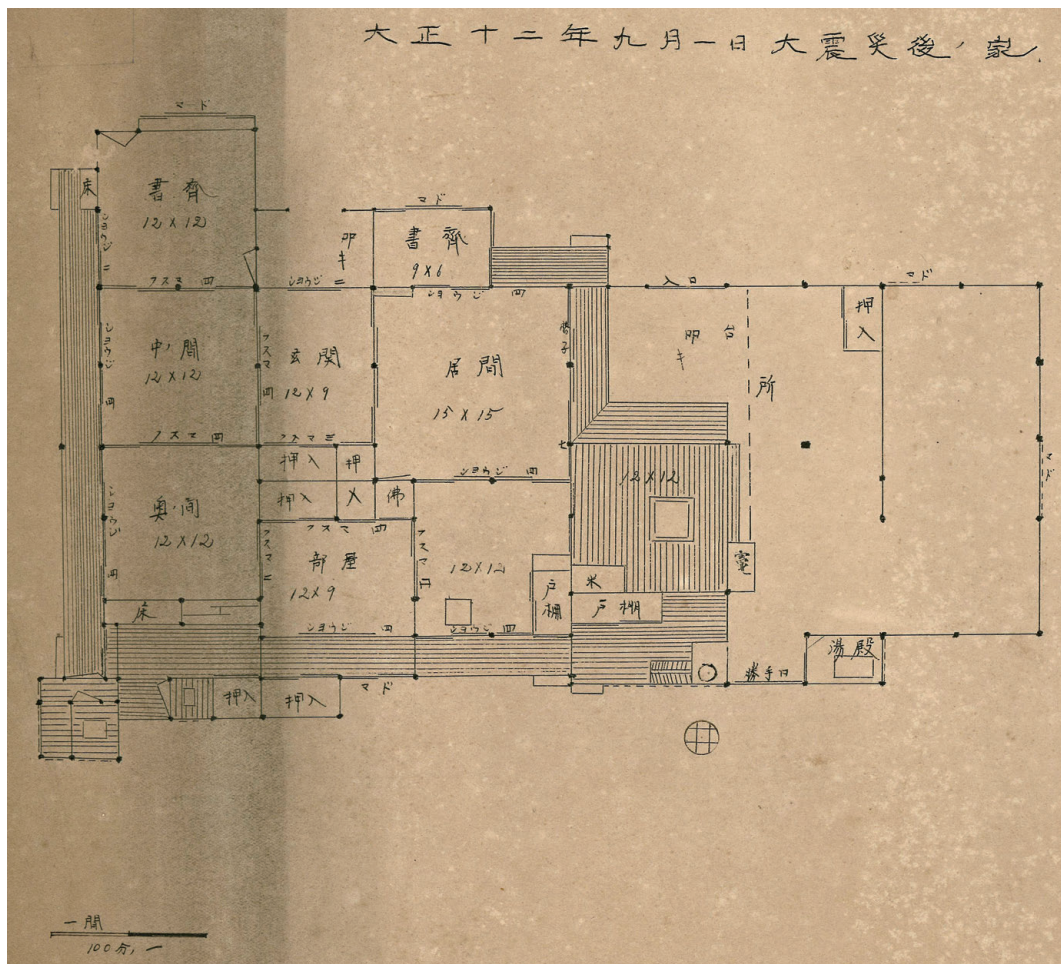
火炉1（北側）



火炉2（南側）

図1 レンガ製の炉

今回は主屋の解体工事で発見されたレンガ製の炉を紹介します。ヒロマで発見された南北に並ぶ2基の炉は多摩地域の古民家で類例のある養蚕用の「火炉」と考えられます（図1）。いずれも赤レンガで長手積み、内部には灰や炭化物、破損したレンガなどが認められました。なお、一般的に火炉は床下に作られ、床板に設けられた蓋（簀子・格子状）から暖まった空気を通すように、天井の換気口と合わせて設計されています。幕末から昭和にかけて日本の主要な輸出品となった生糸は、蚕が蛹になる過程でつくる、1本の糸を吐いて固めた繭を解いて紡いだものです。蚕の飼育に関する記述は当主が残した日記（本田覚庵日記、本田定寿氏の日記等）にみられ、本田定寿氏の日記からは養蚕を仕事としたという内容を読み取ることができます。火炉を用いた蚕の飼育方法（温暖育・折衷育）は明治時代中期以降に普及、多摩地域の古民家では火炉の痕跡が認められます。現在、旧本田家住宅の変遷を示す資料として、「大正十二年九月一日大震災前



年九月一日大震災前（後）の家」と題された2枚の手書きの図面が残されています（図2）。この図面を礎石・遺構の検出状況写真と重ねると（図3）、礎石と柱の位置がほぼ一致していることが分かります。この間取り図は誰がどのような目的で記録したのかまだ分かりませんが、当時の家主であった本田定寿氏（本田家14代）、あるいは旧本田家住宅の建築に関わった人物の意向がうかがわれます。関東大震災が人々に与えた影響は計り知れません

図2 「大正十二年九月一日大震災後ノ家」図（方角は上が南、下が北となっています）



が、本田家がこれほど正確な図面を作成した理由には、震災によって家屋の一部を失うという経験から、本田家住宅のあり方を後世に伝えたいという思いがあったのではないのでしょうか。いずれの間取り図にも、チャノマの北側に方形の区画がありますが、現存する掘り炬燵より廊下に近い位置に描かれています。これが、描く場所を間違えたものか、以前に存在した別のものかは明らかではありません。なお、現況ではチャノマ、ヒロマ共に畳敷きで、炬燵も火炉も見えていない状態でした。間取り図の区画が炬燵であるとすれば、掘り炬燵と火炉が並ぶように配置されていることから、大正12年より後に、掘り炬燵を部屋の中央に寄せた（火炉が存在し、位置を合わせた）、もしくは炬燵の移動に合わせて火炉を作ったと推測されます。掘り炬燵はレンガとセメントで作られており、1段目の内面に煤が付着しているため、炬燵として使用される前には別の機能を持っていたのかもしれませんが。また、この図面に火炉が描かれていない理由としては、大正12年より後に構築される、存在しているが機能していない、機能しているが認識しづらい状況であるなどの理由が考えられます。北側の火炉（火炉1）は破損した状態で、一部のレンガは内部に収められており、部屋の床板は塞がれていました。一方で、南側の火炉（火炉2）は畳を上げれば使用することができる状態で残されています。間取り図を比較すると、震災前に存在していた主屋南側の土蔵、北側の蔵および蔵に接する部屋が無くなり、土間にある湯殿が南側から北側に移動しているなど大幅に改変されていることが分かります。火炉1が使用出来なくなった原因が震災であるとすれば、大正12年以降に蓋を外して床板を敷いたと考えられます。なお、ヒロマ北側、火炉1の床は、床板の下の床組みも新しい部材に取り換えられていました。南側は床板や床組みは古い部材のままです。床組みの修理という視点から見ると、火炉1は人為的に取り壊された可能性があると言えます。その後、掘り炬燵や火炉が不要となり、畳の下で時を過ごすことになったのでしょう。今後、本田家が所蔵する当主の日記や記録類の解読、養蚕に関連する道具の調査をさらに進め、震災や養蚕が当時の本田家や家屋に与えた影響についてお伝えしたいと思います。

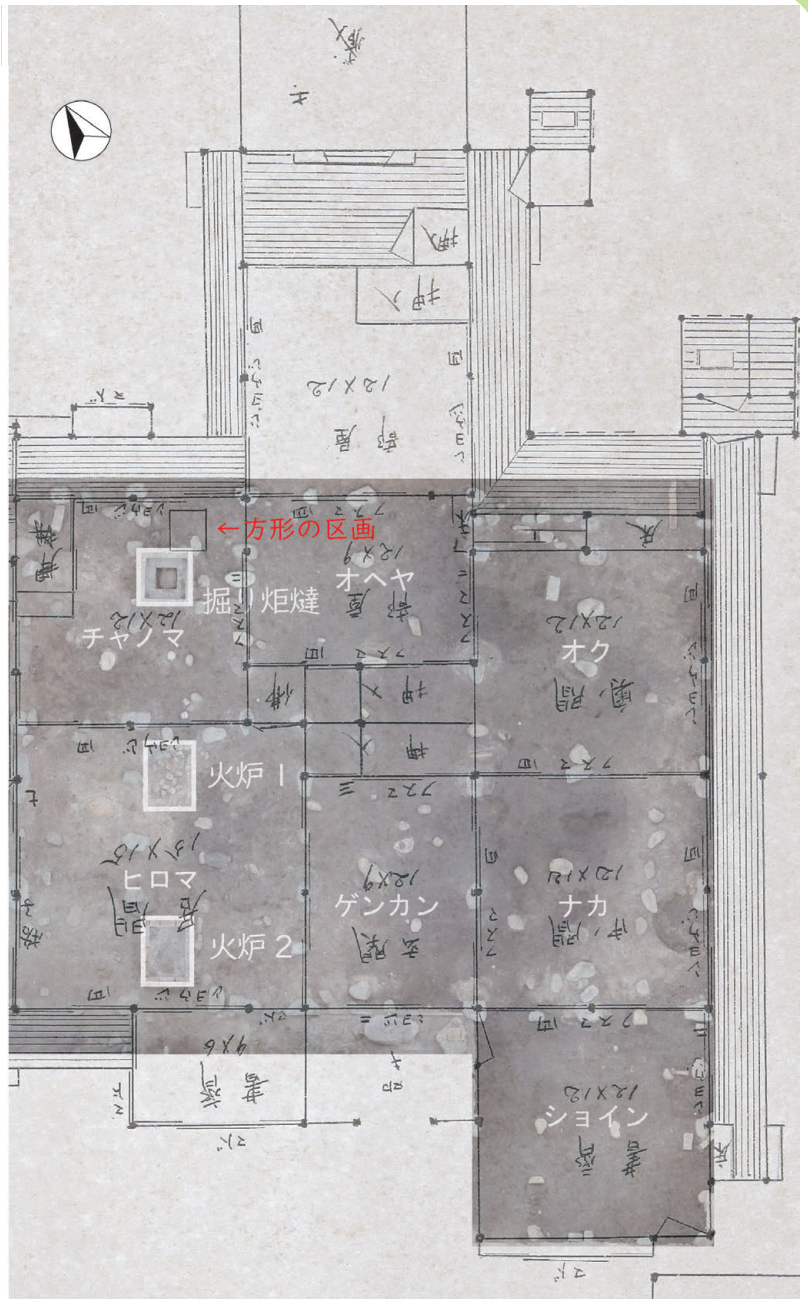


図3 旧本田家住宅主屋東側 礎石・遺構検出状況および「大正十二年九月一日大震災前ノ家」図（重ね図）

（生涯学習課社会教育・文化芸術係 清水 香）